

死は「別れるとき」

—岸本英夫の生死観—

要旨

筆者は十五年ほど前、岸本英夫の『死を見つめる心—ガンとたたかった十年間—』を取り上げ、拙論「岸本英夫のたたかい」をものしたことがある。そこでは、この書を闘病記としてとらえ、岸本がガンにどう対処したかをたどっていった。本論でも主として『死を見つめる心』を取り上げるが、今回はそこから岸本の「生死観」を探ろうとした。岸本は来世を信じていなかった。主論文に「別れるとき」があるように、死は「別れるとき」というのが、岸本の基本的な考えであった。その「別れるとき」の意味を明らかにするとともに、岸本の求めた来世をあてにしない人生の「幸福」とはどういうものであるのかを考えてみたい。

はじめに

筆者はもう十五年も前、「岸本英夫のたたかい」（拙著『私の「死への準備教育」所収』）という題で岸本について書いたことがある。岸本の著書『死を見つめる心—ガンとたたかった十年間—』の主論文

大* 町 公

「わが生死観」「別れるとき」を中心に、ガンを患って以降の岸本の死についての考えの移り変わりをたどってみた。当時は著名な闘病記の一冊として読んだ。今回は、岸本の生死観いかんということで読み直した。

筆者は当時四十代の初めであり、生涯のテーマに生死観を選んで間もない頃であった。わからないところももちろんあった。今はわからなくても、いずれ年を取り、岸本の年に近づけばもつとわかってくることもあるだろうと考えていた。現在筆者は五七歳を迎えたが、相変わらず死を遠巻きにしながら、ぐるりを回っているだけのような気がしてならない。今回そういう自分を確かめ、叱咤するという意味もあって『死を見つめる心』を読み直してみた。前回には気づかなかったこともあった。いくつかの問題に関しては答えを出しておきたいと思う。

岸本は東京オリピックの年、昭和三九年、六〇歳で亡くなった。柳田邦男は、『死を見つめる心』は刊行後の何年間か、読者の多くに「岸本氏のようにありたいものだ」という羨望の気持を抱かせたと書いている。^{〔1〕}「いつも平常心を失わず、病状がかなり進んでからも、ア

アメリカの大学での講義や国際的な文化会議に何度も出かける気力を失わなかった。」からであろうが、それでも私は強い違和感を覚えざるをえなかった。『死を見つめる心』には、「私の内心は、絶え間ない血みどろのたたかいの連続であった。」という言葉もある。「岸本氏のようにありたい」なんてとんでもない、無宗教の立場を貫くのは並大抵のことではないのという思いがある。

違和感のもう一つの理由は、岸本が哲学者であるということと関連している。岸本はむしろ進んで死に立ち向かったのである。岸本は、図らずもアメリカで癌告知を受けることになった。告知はまだアメリカでも一般的ではなかった時代である。将来日本においても癌を告知する日は来るであろう。しかし、来世を信じることの難しい時代である。そのとき、一つの例として、多くの人の参考になるような、しっかりとした生き方がしてみたいという思いがあつただろう。そして、それは哲学者なればこそその使命というか、意地でもあつただろう。

「私は、文字どおり絶望の淵に立っていた。しかし、私は、迫ってくる死から逃避しようという気持には、ならなかった。死をゴマ化せうとも、考えなかった。…そして、どうしても逃げ切れぬものなら、いつそのこと思い切つて、死と正面から取組んで見ようという気になつた。自分の死の機会に、一般的な死の問題について、できるだけ深く考えてみようと思うようになったのであつた。」

ここ十五年間、最も大きい出来事の一つは、インターネットの出現である。筆者にとつてその最も大きい恩恵の一つは、古本の購入が比較を絶して容易になつたことである。一、二冊ずつであつたが、最近ようやく『岸本英夫集』全六卷（溪声社）をそろえることができた。そこで、「あとがき」のかたちで、六人の高弟たちのエッセーを読むことができ、恩師の死のそれぞれの見方を知つて、ずいぶん参考になつた。

第一章 「わが生死観」

しばらくは、「別れるとき―死に出逢う心構え―」（昭三六年七月）の記述を軸に、岸本の考えを追うことにする。論文は「私は、七年間、執拗にくりかえされる癌の再発とたたかつてきた。目前にちらつく死の影に面と向かい、これと、真向からとりくんで生きてきた。」で始まる。岸本はアメリカで思いがけなく癌が見つかった。皮膚の癌、それもたちが悪いといわれるほくろの癌、メラノーマであつた。医者は最悪の場合あと半年の命と告げた。それからすでに七年がたつ。癌は再発を繰り返し、岸本はすでに大小二十回の手術をした。死は単なる観念の問題でなく、直接的な経験の世界に踏み込んでいる。死にどう対したらいいのか。

岸本は宗教学者である。宗教には、死後の世界について説いているものは多い。しかし、岸本は死後の世界があるとは考えていない。死

に直面しても、そのような世界がありうるということに納得できない。あると考えるとしたら、どんなに気持ちが悪くても思うことはある。岸本は「死後の世界」や肉体を離れた「靈魂」の存在を信じていることができない。すると、死というものは「無」に近くなる。「この自分が、なくなってしまうこと以外にはない。」岸本はこの点にひっかかる。岸本にとって、自分が「無」になってしまうことは、「考えただけでも、身の毛のよだつ思いがする。」この部分は「わが生死観」から引用しよう。初めてこの箇所を読んだとき、筆者はぶったまげた。東大の先生ともある人が、「死が恐ろしい」と、こんなにまでストレートに言っているのかな、と思ったほどだ。

「人間にとって何より恐ろしいのは、死によって、今持っている『この自分』の意識が、なくなってしまうということだからである。死の問題をつきつめて考えていって、それが『この、今、意識している自分』が消滅することを意味するのだと気がついた時に、人間は、愕然とする。これは恐ろしい。何よりも恐ろしいことである。身の毛がよだつほどおそろしい。」

「死によって、…『この、今、意識している自分』が消滅する」。岸本にはとてつもなく恐ろしいことであったが、しかし、そのことかえって、死というものを考えるのに、この角度にこだわり続けたのである。

さて、「わが生死観」によれば、生死観を語るとき、二つの立場がある。一つは自分のことはさておき、「人間一般の死の問題」について考えようとする立場である。「一般的かつ観念的な生死観」である。書店に並ぶ『日本人の生死観』といった類の著作は、その代表的なものである。

もう一つは、「もつと切実な緊迫した」立場である。自分自身の心が「生命飢餓状態」におかれている場合の生死観である。「生命に対する執着や、…死の脅威におびやかされて、いてもたってもいられない状態」におかれた場合の生死観である。「ギリギリの死の巖頭にたつて、必死でつかもうとする自分の生死観」である。

「目前の近い将来…自分の生存を続けてゆく見通しが断ちきられる場合」、人間は「生命飢餓状態」に陥る。そのとき、「生理心理的な一つの力」である「生命欲」が現われ、「はげしい生への執着となり、死に対する恐怖となって現われる。」この要素は生死観の二つの立場を、質的に全く別個のものとする。

「生命飢餓状態」におかれた人間は、観念的な生死観に何を求めるのか。「はげしい死の脅威の攻勢に対して、抵抗するための力になるようなもの」である。岸本は「それに役立たないような考え方や観念の組み立ては、すべて、無用の長物である。」と両断する。

第二章 「死は実体ではない」

癌を患ってすでに七年がたつ。しだいに、二つのことがはっきりしてきた。一つは「人間には無ということ、考えられない」のだということである。

「人間が実際に経験して知っているのは、自分が生きて生活しているということだけである。人間の意識経験がまったくなくなってしまう状態というものは、たとえ概念的には考ええても、実感としては考えられないことである。」

「わが生死観」では、これを「死というものは、実体ではない」と表現している。これを裏返せば、「人間に実際与えられているものは、現実の生命だけだ」ということである。「死というのは別の実体であつて、これが生命におきかわるのではない。ただ単に、実体である生命がなくなるといふだけのことである。」そういうことに気がついた。こういう理解は、「何でもないようであるが、実は私には大発見であつた。」とまで言っている。大きな転機だつたようだ。

その「考えられない」こと、つまり「無」を、死にむすびつけて考えようとすると、恐ろしいこととなる。死をそういう角度から考えなくてはならない、と自戒する。では、どういう角度から、考えたらよい

のか。

「人間にとって何よりおそろしいのは、死後の世界があるか、ないかということより、あるかないかわからないままに、生命欲に圧倒され、無理に、あると自分にいいきかせて、なぐさめようとする。しかし、どうしても疑いがおこつてきて、煩悶するようになることではないか。それが、いちばん悲惨ではないか。」

そこで、岸本は「死後の世界はないのだと心にきめた。あてにならぬことはあてにしない、ときめたのである。」そして、「死後、極楽だの天国だのがあるという考えかたで自分を救おうとしないで、なくとも耐えていくことを考えはじめたのである。」「天国や極楽がなくても耐えていく。言葉を変えれば、「死後のことはわからない、という建前のもとに、自分の生命欲、生命飢餓感とたたかつてゆくことにしたのである。」

では、どのように「たたかう」のか。

「私は、それは、残された時間を、できるだけ充実して生きることだと思つた。生命の充実感にあふれるような生き方をしていけば、死の恐怖に勝つてゆけるのではないか。」

こうして、岸本は、「できるだけ充実して生き」ていけば、「死の恐

怖」に押しつぶされることなく、「耐えていける」のではないかという希望を見出すことができたのである。しかし、これで死の問題が解決したわけではない。「大発見」後も、「やはり、私は、ひまがあれば、死というものは何か、と考えざるをえなかった。」と書いている。

第三章 「別れのとき」

(1) 成瀬仁蔵氏・告別講演

しだいにはつきりしてきたもう一つの話は、「死は別れのとき」という考えである。それにはある出会いについて語らねばならない。岸本は「ふとした機会に、『死』ということに対する考えかたの目がひらけた」と言う。岸本の目をひらかせたのは、日本女子大学創設者成瀬仁蔵氏であった。

成瀬は大正八年肝臓癌で亡くなった。いよいよ死が近づいたとき、病院から大学の講堂に運ばれ、全学生を前にして「告別講演」を行った。学生たちに大変大きな感激を与えたのである。一九六〇（昭三五）年の「成瀬先生記念会」に岸本は講演を依頼された。岸本は講演準備のために、「告別講演」だけでなく成瀬の書いた他の文書も読んだ。その時、ふと、死は「別れのとき」ということに気がついたのである。

「その日、私は講演をしながら、平生の自分とは違ったものがあるのを感じた。心の底から何か激しい気魄のようなものが自分を突き上

げて来るのを意識していた。」と書く。成瀬が「告別講演」を行なった、ちょうどその日に、学生を前にして、講演を行ない、成瀬と、同じく癌を患う自分が重なったのだろう。死はまさに「別れのとき」である、との思いがふつふつと沸いてきた。岸本の講演も学生たちに大きな感動を与えたようだが、最も感動したのは講演者自身だったかもしれない。「死というのは、人間にとって、大きな、全体的な『別れ』なのではないか。そう考えたときに、私は、はじめて、死に対する考えかたが、わかったような気がした。」と書いている。

拙論では、『死を見つめる心』に収められたもののうち、七年目の「大発見」、および「死は別れのとき」につながる三五年一月日本女子大学での講演以後に書かれたものを中心に扱うことになる。以下に列挙するところなる。

- 「現代人の生死観」（昭和）三五年六月 「綜合文化」七月号
- 「別れのとき」三六年七月 NHKテレビ放送
- 「癌の再発とたたかいつつ」三七年一月 「婦人公論」三月号
- 「私の心の宗教」三七年七月 NHKラジオ「人生読本」で放送
- 「命ある限りゆたかに」三八年二月 朝日新聞
- 「わが生死観」三八年十月 「理想」十一月号

(2) 死への心の準備

岸本はこの「別れ」についての考察を続ける。

人間は一生のうちに、一度や二度、長く暮らした土地、親しい人びとと別れなければならない。もう二度と見ることができない、会うことはなれと思つて別れることになる。このような「別れ」には、当然「深い別離の悲しみ」をともしなう。

「しかし、いよいよ別れのときがきて、心をきめて思いきつて別れると、何かしら、ホツとした気持にもなることすらある。人生の、折に触れての、別れというのは、人間にとっては、そのようなものである。人間は、それに耐えていけるのである。」

死というのは、「このような別れの、大仕掛けの、徹底したものであるか。」よく考えてみると、「死にのぞんでの別れは、それが、全面的であるということ以外、本来の性質は、時折、人間が、そうした状況におかれ、それに耐えてきたものと、まったく異なつたものではない。」死と「ふつうの別れ」との間には共通点がある。本質的には変わらない。別れに耐えてこれたのなら、死にも耐えられるのではないか。岸本は死を「耐え」ようとしたのである。死を「別れのとき」と考えられるならば、他の別れと同様、死も耐えられるのではないかと考えたのである。

それなら、「死も、そのつもりで心の準備をすれば、耐えられるのではないだろうか。」普通の別れのときには、人間はいろいろと準備をする。心の準備をしているから、別れの悲しみに耐えることができる。

る。本格的な別れである死の場合、かえつて人間はあまり準備をしていない。人間は死について考えたがらないことが原因だろう。普通の別れでも準備するのだから、死のような大きい別れは、準備なしに耐えられるわけがない。では、死の準備をしてみたらどうか。

「そのためには、今の生活は、また、明日も明後日もできるのだと考えずに、楽しんで芝居を見るときも、碁を打つときも、研究をするときも、仕事をするとときも、ことによると、今が最後かもしれないという心がまえを、始終もつているようにすることである。そして、それが、だんだん積み重ねられてくると心に準備ができてくるはずである。その心の準備が十分できれば、死がやってきても、ぶつとりと、執着なく切れてゆくことができるのではないか。」

「ぶつとりと、執着なく切れてゆくことができる」かどうかは、筆者は今もわからない。岸本は「心の準備」ということに気づいて、「ずいぶん、心がおちついてきた。」そして、「死というものが、今まで、近寄りがたく、おそろしいものに考えられていたのが、絶対的な他者ではなくなってきた。むしろ、親しみやすいもの、それと出逢いうるものになつてきたのである。」と「言う」。

(3) 死の別れの意味

では、「死という別れ」と「ふつうの別れ」とはどういう点がちが

うのか。「ふつうの別れ」もつらいけれども、つぎの行く手がある。行く手を考えながら、別れることができる。死後の世界を信じられない、「死後のことは知らず、この人間生活だけが生活なのだ」という対場からすると、これは行く手のわからない別れということになる。そこに「深刻さ」がある。

以下、少し長くなるが引用してみる。

「この船出はどこへゆくかわからない船出である。自分の心を一杯にしているのは、いまいる人たちに別れを惜しむということであり、自分の生きてきた世界に、うしろ髪をひかれるからこそ、最後まで気が違わないで死んでゆくことができるのではないか、死とはそういう別れかただ。私は、こう考えるようになったのである。

私が、このような考えかたをすることができるようになったのは、ごく、最近のことである。七年間の死の問題とのたたかいを過ぎてきた結果の、このころになってである。それまでの私は、正直にいつて、死から、一生懸命、目をそむけてきたといってよい。死をみないようにして、そして、ただ、残されている生命の時間を、できるだけ有効に使うとしていた。現在の、目の前の仕事に打ち込んで、もつとも生き甲斐のある時間をつかうことで、死の恐怖、無の恐怖からのがれようとしていたのである。そのために、はげしく、はげしく、生きてきた。

しかし、『別れのとき』という考えかたに目ざめてから、私は、死

というものを、それから目をそらさないで、面とむかって眺めてみる事が多少できるようになった。それまで、死と無といっしょに考えていた時には、自分が死んで意識がなくなれば、この世界もなくなってしまうような錯覚から、どうしても脱することが、できなかった。しかし、死とは、この世に別れを上げるときと考える場合には、もちろん、この世は存在する。すでに別れを上げた自分が、宇宙の霊にかえて、永遠の休息に入るだけである。私にとつては、すくなくとも、この考え方が、死に対する 大きな転機になっている。」

筆者には当初「すでに別れを上げた自分が、宇宙の霊にかえて、永遠の休息に入るだけである。」の箇所は、なんとも唐突に思えたものだ。しかし、関連するといえば、先に引用した「人間にとつて何より恐ろしいのは、死によって、今持っている『この自分』の意識が、なくなってしまうということだからである。」とである。死は別れのときという考えだと、その「なくなってしまう」のが「何より恐ろしい」「この自分」は、では、いったいどこへ行くのかという問題である。読者にとつても、最も関心のあるところであろう。岸本もそれに触れざるをえなかったというのが、今の筆者の解釈である。

(4) 「宇宙の霊」、「永遠の休息」

「すでに別れを上げた自分が、宇宙の霊にかえて、永遠の休息に入るだけである。」この部分をとらえて、宮家準氏は次のように言った。

「ここで興味をひくことは、実体があるのは唯この世の生だけだと強く確信していた合理主義者の彼が、死の怖れがもたらした信念のぐらつきのかなかで、宇宙の霊に帰って休息するという独自の他界観を案出していることである。このことは死に直面した人間にとって他界の存在を信じるのがいかに大きな安らぎを与えるかということを示しているとも思えるのである。」²⁾

思うに、この「独自の他界観」が岸本に「大きな安らぎを与え」というのは誤解、それも案外根強い誤解ではないか。脇本平也『死の比較宗教学』の中にも、次のようなよく似た発言が見られるのである。

「いわば陳腐な『別れ』のシンボリズムが、しかし、岸本の心にとつくりと落ち着き内在化して機能を發揮し、生命飢餓状態に休息を与えるにいたるまでには、大変な手間隙がかかったということになる。」³⁾

この「いわば陳腐な『別れ』のシンボリズム」は、絶筆「わが生死観」には出てこない。岸本は昭和二三年に書いた論文「生死観四態」の中で、「死後における生命の永存」を願う考えの現代版として同様の考えを紹介している。なぜこれが「独自の他界観」なのかも疑問とするが、「大きな安らぎを与える」云々も、これを裏付ける岸本の言葉はない。論文「別れるとき」では、岸本が癌を患って、なぜ「別れ

るとき」という考えにたどり着いたかを、縷々述べているが、それよりも、突然出てきた「すでに別れをつげた自分が、宇宙の霊にかえって、永遠の休息に入るだけである。」のほうがはるかに重要というのでは、文章としておかしい。

「宇宙の霊にかえって、永遠の休息に入る」と同様の内容は、もう一度出てくる。「私の心の宗教」(昭三七年七月)の中でこう言っているのである。

「私にとつては、私の個人の生命力というものは、私の死後は、大きな宇宙の生命力の中に、とけ込んでしまつてゆくと考えるぐらいが、せい一杯であります。それは、いいかえれば、私という個人は、死とともになくなる、ということでもあります。」

テレビ放送の「別れるとき」から一年後、NHKラジオ番組「人生読本」で「私の心の宗教」と題して、こう話したのである。「…と考えるぐらいが、せい一杯であります」と。「大きな安らぎ」を与えてくれるものを、こういう風には表現しないだろう。ここでは、いわば、一年前のテレビでの発言を、誤解のないようにはつきりさせたのではないか。

(5)「うしろ髪をひかれる」

さて、先ほどの引用の中に、「自分の生きてきた世界に、うしろ髪をひかれるからこそ、最後まで気が変わらないで死んでゆくことができるとはできないか」という一節がある。

どういふことなのだろう、と筆者自身も思った。生死観については後で述べるが、生死観と結びつけて、岸本の高弟の一人高木きよ子に次のような発言がある。

「この思想にはじめて接した時、私は何かわかったようなわからないような気がした。が、これは著者のいわゆる『この世に自分に代るべきものを残すことよって生命の存続をはかろうとする』生死観の一つのあらわれである（『生死観の類型』）、と気付いたとき、この図式がとけたと思った。⁴」

この「うしろ髪」発言については、岸本自身に次のような発言がある。ちなみに、「生死観の類型」は、のちに「生死観四態」と改められて、『死を見つめる心』に入れられる。

「ところが、ふと気がついてみると、このような心（うしろ髪を引かれる思い）をさす―注大町）が、実は、一つのプラスの効果を持っていることを知った。すなわち、それは、死の絶望の前に屈して、崩れ落ちてしまおうとする自分に、最後のぎりぎりの気の張りを与えて

くれていたのであった。」

岸本は自分の死後、妻や息子たち（告知を受けたとき、長男は大学浪人生、次男は中学三年）がどうして生きてゆくだろうかということ、「非常に気にかかった」、「死に切れないほど心配であった」。「うしろ髪を引かれる思い」である。しかし、それだけではない。それが、「一つのプラスの効果を持って」おり、「最後のぎりぎりの気の張りを与えてくれていた」と言うのである。生死観には頭の中だけではかりがたい面がある。実際、その生死観を生きてみないとわからないところがある。これもその一つだろう。

「死と無といっしょに考えていた時には、自分が死んで意識がなくなればこの世界もなくなってしまうような錯覚から、どうしても脱することが、できなかった。しかし、死とは、この世に別れをつけるときと考える場合には、もちろん、この世は存在する。」

自分の死後も「存在する」「この世」には、妻子だけではなく、同僚や友人や弟子たちもいる。自分の仕事も残る。「自分の死後、家族や知友が、自分のことを想い出してくれるだろうと考えることは、非常な慰めになった。」「自分の生命の代りに、自分の仕事、存続してゆく。そう考えることは、たしかに、大きな慰めになった。」と書いている。

第四章 「よく生きる」

先の引用にも、「生命の充実感にあふれるような生き方をしていけば、死の恐怖に勝つてゆけるのではないか。」とあった。では、それはどのように生きることなのか。その点は、「別れのとき」の一年後に発表された「私の心の宗教」に詳しい。それを見ていこう。

「自分にとっては、死後の生命という考えかたは、まったく、たのむに足りないこととしか、私には、考えられないのであります。たよりになるのは、この現実の世界における生命だけなのであります。それだからこそ、私自身にとって、この現実の命は、尊いのであります。…私はどうあっても、この人間生活を、充分によく、幸福に生きてゆかなければならない、と思っっているのであります。」

では、「ほんとうの幸福」とは何か。幸福と思われているものにはいろいろあるが、一本強い筋金が入ると、力強い、「ほんとうの幸福」になる。岸本にとっては、その筋金となる要素は、「生き甲斐」であった。「生き甲斐という感じに裏打ちされている幸福は、死の恐怖に對しても、強い抵抗を示してくれます。」と言う。

では、どうすれば、人間は自分の生活の中に、そのような「生き甲

斐」を感じることができるのか。岸本は、いろいろな苦しい経験を通して、「心が、少しずつ開けてきた」と言う。「生き甲斐」ということは、がむしゃらに何かをするのではなく、「むしろ、一つの目標をもつて、その目標に心を打ち込んで、一筋にすすんでいくことの中にある」のではないか。「二つの方向」に、あるいは「一つの目標にむかって、自分を打ち込むことができるかどうか」が大切なのである。

本当に、自分が、一つの目標に打ち込んでゆくことができる、「自分は、自分をそれにささげつくしたという感じ」が出てくると言う。「自分の命のすべてをあげて、ささげつくしえたときに、人間は、もつとも強い生き甲斐を感じて、本当に幸福なのだということでもあります。」ここに、「人間生活の、不思議なからくり」がある。「自分にとって、もつとも大切なものは、命なのでありますが、その大切な命をすてることができるようになったその時に、私は、自分の命の、もつとも強い生き甲斐を感じ、私は、もつとも幸福である、ということでもあります。」と言う。

「幸福」であるには、打ち込むに値するような目標がなければならぬが、では、それは何であるのか

その「目標」となるのは「仕事」であると言う。「自分に課せられた仕事の使命をなしとげること」である。仕事は「職業」をも含むが、狭い意味での「職業」に限定されない。「めいめいの人間が、自分にあたえられているものは、これだ、と考えるような意味での仕事であります。」芸術家にとっては、すぐれた作品を作り出すことが仕事で

ある。学者は立派な研究をなすことである。また、「人間の、ほんとうの幸福」につながる仕事、「他の人々の幸福を高める」ことにつながる仕事には、充分に「生き甲斐」感ずることができると。

そして、「その、仕事にささげつくしたことから生ずる力強い生き甲斐は、死に直面した場合に 있어서、強い力を示すものでありま

第五章 「生死観四態」

岸本に言及するとき、多くの人が引用するものに、論文「生死観四態」（昭和二三年）がある。「死を見つめる心」の中で唯一、警告知前に書かれたものである。そこで岸本は生死観を、その特徴によって、四つに類型化している。

- 一、肉体的生命の存続を希求するもの
- 二、死後における生命の永存を信ずるもの
- 三、自己の生命を、それに代る限りなき生命に托するもの
- 四、現実の生活の中に永遠の生命を感得するもの

実際に人びとの心の中で働いている生死観は、一つによって構成されてはいない。諸要素をどれほどかずつ含んでいる。複合的な形であり、それは生死の問題に対してしているのである。

現代人は「文化の進展、科学的思考の展開、批判的精神の発達」により、「靈魂の不滅を希求し、伝統的な来世観」を受け容れるのが難しくなっている。そこから、「新生面」を切り開くべく、様々な努力の跡が見られるとして、こう言っている。先ほど触れた考えはここに

出てくる。

「あるものは個的な靈魂の存在に納得し得ず、宇宙に遍満する大生命の存在を信ずる。死によって個我を脱した場合に、自己の生命は普遍的な宇宙生命の中に溶け込んで行くと考えるのである。」

現代社会においては、第一、第二よりは第三、第四の類型の生死観が次第に優位を占める。「近代人の一般的傾向としては、不可知は不可知として、解決せずに、そのままにしておこうという気持も強い。」とも言っている。

岸本の生死観もまた「複合的」であった。先の、「すでに別れをつげた自分が、宇宙の靈にかえって、永遠の休息に入るだけである。」も入れるとなると、二の要素も見られる。高木は三だと言ひ、確かにその要素もあるが、四の要素が大きいのではないか。「現代人の死生観」を読んであらためてそう思った。

「理想を追求する生活の中に、自分の生命よりも、もっと大切なものができている。それは、自分の生命を超えたものである。それゆえ、

それは自分の死と一緒になくなる性格のものではない。それは死も冒しえないものである。人間のこのはげしいたたかひの場において、それが、もつとも力強い自分の心の支えになる。そのように、よく生きることが、私は、生死の問題の解決の大切な方法と考えるのである。」

あとがき

相良亨『日本人の死生観』は、岸本からすれば、「無用の長物」の一つということになるだろう。一九九八年衆議院議員新井将敬氏が自殺したとき、本書は自宅の机の上におかれ、まえがきの部分に傍線が引かれていたことで、マスコミから不似合なスポット・ライトを浴びたことがあった。自殺したホテルの一室では、ベッドのそばに空になったウイスキーの壺が複数散らばっていたという。筆者より一学年上（昭和二三年一月生）の新井が五〇歳で自殺する時、ウイスキーの力を借りたことはわかる。それに、死生観を求めたこともよく理解できるのである。これから自分が行こうとしている世界について、自分が何も知らないのは、もどかしい限りであったろう。

横道にそれかけたが、相良はこの本の中で岸本を取り上げ、岸本は「死は『別れのとき』』という考えを「わが死生観」と呼んでいるが、こういう考え方は日本の伝統の中にあると指摘した。「死を別れとするとらえ方は、王朝以来のものであるように思われる。この意味において、死をわかれとみることはめずらしいことではない」と。⁽⁵⁾おそ

らくその通りだろう。

しかし筆者はそのことは岸本の死生観の価値を高めこそすれ、引き下げることはないと思う。成瀬の資料を読んで、死は別れのとき、「そう考えたときに、私は、はじめて、死に対する考えかたが、わかったような気がした。」と書いたのは、岸本の心がようやく伝統の中に落ち着き場所を見出したということではないか。

心の準備と生き甲斐によって、死は「耐えられる」。「別れのとき」とは、死に対して日本人の心がとる文化的な形なのではないか。われわれの心は「死は別れのとき」という形をとって、ようやく「悲痛に耐えることができる」。岸本は「死は別れのとき」という伝統的な形に新たな命を与えたとと言えるだろう。

参考文献

- 岸本英夫『死を見つめる心』講談社文庫、一九七三年
 岸本英夫『岸本英夫集・全六卷』溪声社、一九七五～七六年
 宮家準『生活のなかの宗教』日本放送出版協会、一九八〇年
 村尾勉『死を受け容れる考え方』人間と歴史社、一九八一年
 中村真一郎編『死を考える』筑摩書房、一九八八年
 相良亨『日本人の死生観』ベリかん社、一九九〇年
 柳田邦男編『同時代ノンフィクション選集第一巻「生と死」の現在』文藝春秋、一九九二年
 脇本平也『死の比較宗教学』岩波書店、一九九七年
 大町公『私の「死への準備教育」』法律文化社、一九九七年

注

ここでは、岸本英夫『死を見つめる心』を除く参考文献の引用箇所を記す。

(1) 『同時代ノンフィクション選集第一巻 「生と死」の現在』二〇頁

(2) 『生活のなかの宗教』十七頁

(3) 『死の比較宗教学』三八頁

十五年前の拙論の中で、私は作家中村真一郎が「わが生死観」に付した注釈を引用した。

「これは現代のすぐれた宗教学者が、自己の確実な近い死を知り、その恐怖を通して、ひとつの悟りに到達するまでの、率直で明快な記録である。」〔死を考える〕一九九頁

この「悟り」を意図的に七年目の「大発見」をさすとしたが、普通に読むならば、この「悟り」は宮家説と同様だろう。

(4) 『岸本英夫集』第六巻、三三七頁

(5) 『日本人の死生観』一七四頁

La mort, c'est "le temps de se séparer"
— la conception de la vie et de la mort chez Hideo KISHIMOTO —

Isao Omachi

Hideo KISHIMOTO, qui était professeur de la science des religions à l' université de Tokyo, avait un cancer de la peau (mélanome), qui est dangereux et très progressif.

Heureusement il a survécu dix ans. Juste après sa mort, un livre 《Le coeur qui regarde fixement la mort》 a été publié en rassemblant des essais qu' il avait écrits pendant dix ans en proie à la peur de mourir. Il ne croyait pas en l'autre monde.

Il pensait que la mort, c' était le temps de se séparer. En étudiant ses essais, surtout 《Le temmps de se séparer》, j'examinerais ce qui est sa conception de la vie et de la mort.